

日本の世界遺産

【登録基準の具体的内容】文化遺産

法隆寺地域の仏教建造物群

(i) 法隆寺、法起寺に残る木造建造物群で最古のものは7世紀にさかのぼる。これらの建造物は、優れた設計力と装飾美を併せ持っており（エンタシス）、古代人の美的センスの高さを今に伝える。

(ii) 7世紀～8世紀に建立された西院の金堂や五重塔、回廊、中門からは、北魏の時代の影響が確認できる。また、8世紀に建立された東院の夢殿、伝法堂などには唐の影響がよく表れている。法隆寺地域の仏教建造物群からは、大陸と日本の交流の様子を確認することができる。

(iv) 法隆寺地域に残る木造建造物群の建立時期は、7世紀～18世紀までの1000年以上に及んでおり、時代ごとの様式の変遷も確認できる。

(vi) 日本の宗教史上、仏教の伝来は大きな転換期といえる。仏教の普及を進めた聖徳太子（厩戸皇子）ゆかりの建造物群は、その歴史を今に伝えている。

姫路城

(i) 大天守に代表される設計技術の高さと、白漆喰などを施した装飾美のすばらしさから、木造城郭建築の最高傑作とされ、人類の創造的資質を示す傑作であること。

(iv) 日本の木造城郭建築という重要な様式の建造物の代表であり、その特徴がよく保存されている建造物であること。また、山城から平山城へと城郭建築の様式が移行していく時代性を表す建造物であること。

古都京都の文化財

(ii) 8世紀後半から19世紀中頃まで、天皇が住む都であった京都は、政治、文化、経済の中心地として、それぞれの時代で日本文化の発展を牽引してきた。建築様式は仏教伝来時に中国から伝わった仏教建築様式が、平安時代に日本人の感覚にあった形に変化していったものであり、桃山時代の豪華絢爛な建築様式は京都で洗練され、日本各地に広まった。その後16世紀以降、日本全国に京都を模した「小京都」と呼ばれる新しい街が築かれた。

(iv) 17件の登録物件は、7世紀末から17世紀までの各時代の建造物で構成されている。各時代の建築様式を如実に表す建造物群であるだけでなく、それぞれの建造物が、庭園や周辺の自然環境と見事に融和しており、日本文化の重要な価値を表している。

白川郷・五箇山の合掌造り集落

(iv) 合掌造り家屋は、雪の重みと風の強さに耐えるため、釘などの金属物は一切使用しないなど、その土地に合わせた建築様式で、農村の民家のなかでも、独特の特徴をもつ重要な様式の建造物集合体として高い価値がある。

(v) 合掌造り集落は、山間部で暮らす人々の文化を代表する伝統的集落であり、この地域の生産体制、大家族

制度といった特性や、伝統に見合った土地利用の顕著な見本である。また、大集落（白川郷）、中集落（相倉地区）、小集落（菅沼地区）といったタイプの違う集落形態を登録することで、それぞれの集落の共通性と独自性が認識できる。

厳島神社

（i）「厳島神社」は、12世紀に時の権力者、平清盛の造営によって現在の壮麗な社殿群の基本ができあがった。海上に立地し、背景の山容と一体となった景観は、平清盛の卓越した発想力の賜物である。

（ii）平安時代の貴族の住宅建築様式である寝殿造りを神社建築に取り入れており、同一文化圏内の価値観の交流を体現している。また、海と山、そして建造物が一体となって形成された景観は、日本人の精神文化を表現する景観設計の発展にも大きな影響を与えている。

（vi）日本古来の神道は自然崇拜を基本としており、厳島神社は、このような日本人独自の精神文化を顕著に表した建造物群及び景観設計である。

広島平和記念碑（原爆ドーム）

（vi）広島平和記念碑（原爆ドーム）は、ICOMOSの報告書に「歴史的価値や、建造物としての価値は認められないが、世界平和を目指す活動の記念碑として、世界中でもほかに例をみない建造物である」という記述があり、登録基準（vi）のみでの登録となった。登録基準（vi）には、「この基準は、ほかの基準とあわせて用いられることが望ましい」という但し書きがついているが、それはこの時の世界遺産委員会で出された意見である。

※「負の遺産」と考えられる物件は、登録基準（vi）のみで登録されることが多い。

古都奈良の文化財

（ii）平城京は、北と東西を山や小高い丘陵に囲まれ、南にあけた盆地に位置する。こうした立地は、当時の中国の風水思想に基づき、王城の建築場所としてふさわしい地形を選定したものであった。そして、平城京に建設された建造物からは、8世紀の日本における木造建造物の文化的、芸術的レベルの高さと、中国本土及び朝鮮半島と日本の文化交流の様子を知ることができる。また、現在の中学や朝鮮半島からはこの時代の木造建造物がほとんど残っていないため、世界史的見地からも評価が高い。

（iii）登録物件の「平城京跡」は、日本史の中で重要な意義を有すること「平城京」の様子を今に伝える。「平城京」は710～784年の74年間と言う限られた期間の都であった。中世以降は、平城京があった場所の東側（現奈良市の中心）に新しい街づくりが始まった。再開発がされなかったため、土に埋もれていた平城京跡から発掘される数々の遺品からは、8世紀の日本における社会・経済状況や、文化、慣習などを確認することができ、考古学上、歴史学上においても大きな価値をもつ。

（iv）登録物件に含まれる各寺院、神社からは、宗教の影響力のもとで律令制が日本全国に定着していき、寺院や神社の力が社会的、政治的に大きくなっていった様子が伝わる。そして、これらの建造物群は、奈良時代の日本の寺院建築様式を示す顕著な価値を有している。

日光の社寺

(i) 東照宮の建造物群は、「寛永の大造替」の際に、卓越した才能をもつ芸術家たちにより作られた作品であり、周囲の自然との調和がその芸術性を高めている。

(iv) 東照宮、輪王寺は近代日本の神社建築の発展の様子を今に伝えている。

(vi) 日光の起源は霊場である。日本独自の神道思想に基づき、自然とともに修行する信仰形態は、自然と一体となった宗教空間を創り上げ、その伝統は今なお受け継がれている。

琉球王国のグスク及び関連遺産群

(ii) 日本、朝鮮半島、中国本土、東南アジアとの中継貿易は、琉球王国の文化にも大きな影響を与え、各地との文化交流の上に独自の発展を遂げた。

(iii) グスク跡は、琉球の農村集落を基盤にした成長した豪族（按司）の城塞後で、今は失われた琉球社会の象徴的存在かつ貴重な考古学的遺跡である。また、グスクは歴史的に農村集落の中枢をなしており、先祖への崇拝と祈願を通じて連帯を深める地域住民の心のよりどころとして、今なお琉球文化の重要な核心である。

(vi) 琉球王国時代の事実上の国教であった琉球神道は、現在の沖縄県においても民間信仰として定着している。また構成資産は、沖縄本島が第二次世界大戦の戦場となったために、甚大な被害を受けた。戦争から復興する上で、これらの構成資産が沖縄県民にとって重要な精神的よりどころとなってきた。

紀伊山地の霊場と参詣道

(ii) 紀伊山地の文化的景観を形成する記念碑と遺跡は神道と仏教のたぐいまれな融合であり、東アジアにおける宗教文化の交流と発展を例証する。

(iii) 紀伊山地の神社と仏教寺院は、それらに関連する宗教儀式とともに、1000 年以上にわたる日本の宗教文化の発展に関するひとときを優れた証拠性を有する。

(iv) 紀伊山地は、神社・寺院建築のたぐいまれな形式の創造の素地であり、それらは日本の紀伊山地以外の寺院や神社建築に重要な影響を与えた。

(vi) 同時に、紀伊山地の遺跡と森林景観は、過去 1200 年以上にわたる聖山の持続的で並外れて記録に残されている伝統を反映している。

石見銀山遺跡とその文化的景観

(ii) 16-17 世紀初頭、石見銀山で生産される大量の銀は、その銀が流通することで東アジアだけでなくヨーロッパを含む各国と日本の間の経済的・文化的交流を生み出した。

(iii) 灰吹法と呼ばれる精錬技術の導入により良質で大量の銀生産が可能となったり、600 もの間歩（手掘りの坑道）が出来たりと日本独自の運営形態が発展した。

(v) 「鉱山と鉱山町」「街道」、「港と港町」という形で銀の生産から搬出にいたる鉱山運営の全体像を記す一連の土地利用と社会基盤施設の遺跡が残る。また豊富な遺跡群は鉱山山に関する独特な土地利用を記す文化的景観を表している。

平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び関連する考古遺跡群―

（ii）11世紀末、浄土思想が興隆すると、仏教とともに伝来した伽藍造営や作庭の技術が、日本の水辺の祭祀場における水景の理念と結びつき、独自の浄土庭園を完成させた。これは東アジアにおける建築・作庭技術の価値観の交流を表している。

（vi）浄土思想は、12世紀における日本人の死生観の醸成に重要な役割を果たし、世界の他の地域において類をみない仏国土（浄土）を三次元的に表現する建築・庭園の理念や意匠が直接的に反映された。

富士山

（iii）富士山の荘厳な姿が古来富士信仰を発達させ、様々な芸術や自然と調和的な文化的伝統を生み出したことを伝える例証である。

（vi）富士山が古来より文学や絵画の題材になってきたことや、それが描かれた浮世絵を通じて西洋の芸術にも影響を及ぼした出来事（ジャポニズム）と関連する。

富岡製糸場と絹産業遺産群

（ii）高品質な生糸の大量生産をめぐる日本と世界の相互交流がうかがえる

- ・明治政府による高品質生糸の大量生産のための近代西欧技術導入
- ・日本国内での養蚕・製糸技術改良の促進
- ・日本の高度な養蚕・製糸技術の海外移転による世界の絹産業の発展

（iv）世界の絹産業の発展に重要な役割を果たした技術革新の主要舞台である

- ・器械製糸から自動操糸機までの製糸技術の発達を伝える富岡製糸場
- ・革新的な養蚕技術の開発とその普及を伝える建築物・工作物の代表例

明治日本の産業革命遺産

（ii）九州、山口を中心に進められた日本の近代化は、西洋先進諸国からの積極的な技術導入によってすすめられ、それらの国との文明の交流がうかがえる。

（iv）鎖国状態にあった日本において、非西洋地域で初めて約 50 年間という短期間で飛躍的な経済的発展を成し遂げた産業遺産群は、その歴史上の重要な段階を物語る建築物のまとまった集合体であること。

ル・コルビュジエの建築作品：近代建築運動への顕著な貢献

（i）ル・コルビュジエの建築作品は、人類の創造的才能を表す傑作であり、建築及び社会における 20 世紀の根源的な諸課題に対して顕著な回答を与えるものである。

（ii）ル・コルビュジエの建築作品は、他に例を見ない先駆的なやり方で、過去と決別した新しい建築的言語を開発してみせることによって建築に革命を引き起こした。彼の作品が四大陸で与えた地球規模の影響は、建築史上新しい現象であり、前例のない影響を示すものである。

(vi) ル・コルビュジエの建築作品は、その理論と作品において20世紀における顕著な普遍的意義を持つ近代建築運動の思想と直接的かつ物質的に関連している。一連の資産は、建築、絵画そして建築が融合した「エスプリ・ヌーボー」を表している。彼の建築作品の社会的貢献は、単にある時点での模範的な偉業に留まらず、半世紀を通じて全世界に着実に広められていった建築及び文字による提案の顕著な総体である。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

(ii) 航海安全のための祭祀で捧げられた、多彩な来歴を持つ豊富な出土品によって「神宿る島」沖ノ島は、4世紀から9世紀の間の東アジアにおける諸国家間の重要な交流を示している。数々の祭祀の変遷は、中国大陸や朝鮮半島、日本列島を拠点とした国々がアイデンティティの感覚を発展させた時期に起こり、日本文化の形成に本質的に貢献した活発な交流の性質を反映するものである。

(iii) 沖ノ島に保存されてきた考古学的な遺産は、ほぼ手つかずで残っており、これまでの約500年の間にどのように祭祀が変遷してきたのかを示している。宗像氏の人々は、沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮、九州本土の辺津宮という宗像大社の三つの信仰の場における、宗像三女神への信仰という形で沖ノ島に対する崇拝を確立し、「遥拝」の伝統と共に、島を保護する上で有益な役割を果たしたことを示す。

長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産

(iii) 本資産は、長崎と天草地方の潜伏キリシタンが禁教期にひそかに信仰を継続する中で育んだ独自の宗教的伝統を物語る証拠である。禁教期の潜伏キリシタンが自らの信仰をひそかに継続する中で育んだ固有の信仰形態、大浦天主堂における「信徒発見」を契機とする新たな信仰の局面及び固有の信仰形態の変容・終焉が、12の構成資産によって示されている。

百舌鳥・古市古墳群

(ii) 百舌鳥・古市古墳群における巨大古墳の墳丘形態は列島各地の古墳のモデルとなった。また副葬品、埴輪等も広く影響を与えており、本資産は、日本の古墳文化の交流の中心であった。さらにアジアレベルでの相互交流があったことは、中国製の金銅製の装身具や馬具、ペルシャのガラス器などに加え、朝鮮半島を通じて導入された製作技術による多量の刀剣や甲冑類からも明白である。

(iii) 古墳文化は巨大な墳墓である古墳の築造によって特徴付けられる。特に百舌鳥・古市古墳群は古墳の巨大化の頂点にあたるものであり、日本列島にかつて独自の文化が存在したことを示す顕著な物証である。

(iv) 百舌鳥・古市古墳群は、大規模な労働力の集中によって成し遂げられた記念碑的構築物であり、前方後円墳をはじめとする独特な墳墓形態とその築造技術は、日本列島で独自の発展をみたものである。百舌鳥・古市古墳群にある巨大古墳の設計プランを基に造られた前方後円墳が遠く九州や中国地方などにも存在するなど、それらのことを可能とする高度な土木技術も相まって、日本独自の古墳文化が花開いたものである。

北海道・北東北の縄文遺跡群

(iii) 北海道・北東北の縄文遺跡群は、1万年以上もの長期間継続した狩猟・漁労・採集を基盤とした、世界的

にも稀な定住社会と、足形付土版、有名な遮光器土偶等の考古遺跡や墓、捨て場、盛土、環状列石等の考古遺構で明らかのように、そこで育まれた精緻で複雑な精神文化を伝える類まれな物証である。

(v) 北海道・北東北の縄文遺跡群は定住の開始からその後の発展、最終的な成熟に至るまでの、集落の定住の在り方と土地利用の顕著な見本である。縄文人は農耕社会に見られるように土地を大きく改変することなく、変化する機構に適応する形で永続的な狩猟・漁労・採集の生活の在り方を維持した。食料を安定的に確保するため、サケが遡上し、捕獲できる河川の近くや汽水性の貝類を得やすく干潟近く、あるいはブナやクリの群生地など、集落の選地には多様性が見られた。それぞれの立地に応じて食料を獲得するための技術や道具類も発達した。

【登録基準の具体的内容】自然遺産

屋久島

(vii) 屋久杉が創り上げる森林の美しさは、ほかに類をみない。

(ix) 屋久島は、亜熱帯から温帯への移行帯に位置し、標高 1800 メートルを超える山が 7 座連なる。このような環境が、亜熱帯から亜寒帯までの植物が垂直に分布する貴重な環境を生み出している。また、ヤクシカ、ヤクザルなどの固有亜種の存在も、独自の生態系を表している。

白神山地

(ix) 8000～1 万 2000 年の歴史をもつ、冷温体性を代表するブナ林の顕著な見本であり、人為的な影響をほとんど受けていない。

知床

(ix) 知床は海洋生態系と陸上生態系の相互作用を示す顕著な例である。そのたぐいまれな生物生産は流水の形成に大きな影響を与えている。

(x) 知床は、シマフクロウやシレットコスミレなどの絶滅危惧・固有の動植物が生息する地域であり、またサケ類やトド、鯨類などの海洋生物の生存にとって重要な海域を含む。更には、本地域は世界的にも絶滅の危機にある海鳥の生息地であり、渡り鳥にとって重要な場所でもある。

小笠原諸島

(ix) 大陸と一度も陸続きとなつたことのない海洋島のため、生物種が独自の進化を遂げた。陸産貝類の固有率が高く、適応放散の証拠を示している点が評価された。

奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島

(ix) かつて大陸の一部として大陸と共通の陸生生物を有していたが、大陸からの分離、海峡や海水面変化により島々が分離・結合を繰り返し、小島嶼群として成立する過程において、多くの進化系統に種分化と固有化が生じた。登録地は、大陸からの距離や分離時期が異なる地域を代表する 4 地域であり、それらを併せることで、これらの地史を反映した大陸島における独特な種分化・系統的多様化の過程を明白に表す生態系の顕著な見本となる。

っている。

(x)登録地には、イリオモテヤマネコ、アマミノクロウサギ、ヤンバルクイナなど IUCN のレッドリスト(2015)の絶滅危惧種（うち 70 種は固有種）を含む陸生動植物の生息・生息地である。また、この地史を反映し遺存固有種と新固有種の多様な事例がみられ、世界的にみても生物多様性の生息域内保全にとって極めて重要な自然の生息・生息地を包含した地域となっている。